

詩篇30-34篇 「狎れない賛美」

1A 栄えにおける懲らしめ 30

1B つかの間の御怒り 1-5

2B 踊りに変えられる嘆き 6-12

2A 主への信頼 31

1B 御手にゆだねる魂 1-8

2B 御手の中にある時 9-18

3B 奇しい恵み 19-24

3A 罪からの救い 32

1B 罪の覆い 1-5

2B 神からの悟り 6-11

4A 新しい歌 33

1B 楽器による歌 1-5

2B 主のみことばによる統治 6-17

3B 注がれる主の目 18-22

5A 祈りの答え 34

1B 主のすばらしさの味わい 1-10

2B 主を恐れる者 11-14

3B 正しい者の叫び 15-22

本文

第三十篇から読みます。

1A 栄えにおける懲らしめ 30

30 ダビデの賛歌。家をささげる歌

ダビデが、家をささげる歌であります。これは自分の家というよりも、神の家のことでしょう。歴代誌第一 22 章 1 節に、「これこそ、神である主の宮だ。これこそ、イスラエルの全焼のいけにえの祭壇だ。」と言っています。ダビデは大きな罪を晩年に犯しました。それは、イスラエルの人口を数えさせたことです。神がアブラハムの約束を実現させて、イスラエルを数多く増やしてくださったのに、その神の民を自分の臣民、自分の所有の民にしようとしたのが、彼の罪でした。彼は、国が栄えたので、その神の恵みを自分の手柄にしようとする高慢の罪を犯したのです。

それで主は懲らしめとして、三つの選択を与えました。三年間の飢饉か、三か月間、敵の剣が追い迫ることなのか、それとも三日間、主ご自身の剣、すなわち疫病がこの地に及ぶことか、と三つ

の選択を与えられました。そして、ダビデは疫病を選び取りました。すると、イスラエル人が七万人死んだとあります。そこで、ダビデはあまりにも苦しくなって、エルサレムに来て民を滅ぼしに来た主の使いに対して、憐れんでくださるようお願いしました。そこで、主の使いが命じたのが祭壇を築くことです。そして、そこで彼はエブス人から、今の神殿の丘の敷地を購入して全焼のいけにえを捧げました。すると、疫病が止まったのです。

おそらく、このことを背景にしたのが詩篇 30 篇であると思われます。中身は、彼自身が病に罹って死にかけたものとなっています。歴代誌では、彼がそのようなになっているようには書かれていませんが、もしかしたら民が罹っている病を自分のもののようにして苦しんでいたのではないかと、思います。

1B つかの間の御怒り 1-5

30:1 主よ。私はあなたをあがめます。あなたが私を引き上げ、私の敵を喜ばせることはされなかったからです。30:2 私の神、主よ。私があるあなたに叫び求めると、あなたは私を、いやされました。30:3 主よ。あなたは私のたましいをよみから引き上げ、私が穴に下って行かないように、私を生かしておかれました。

自分が死に至る病を神が癒してくださったことを、神にほめたたえています。

30:4 聖徒たちよ。主をほめ歌え。その聖なる御名に感謝せよ。30:5 まことに、御怒りはつかの間、いのちは恩寵のうちにある。夕暮れには涙が宿っても、朝明けには喜びの叫びがある。

救い出されたことについて、ダビデは他の民に共に賛美するように促しています。「聖徒たちよ」と呼んで、それから「聖なる御名に感謝せよ」と言っています。聖別された者たちのみが、この世とは異なる神の取り扱いがあります。それは、「御怒りは束の間」ということです。神の民とされた者たちも、懲らしめを受けます。けれども、罰せられることが目的ではありません、聖なるものとされて、この世的な楽しみではなく、真の救いの喜びを手に入れるために導かれるのです。「すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。(ヘブル 12:11)」

夕暮れの涙は、そのまま朝焼けの喜びの叫びになります。私たちは、表面的な喜びでこの世を過ごしてしまいがちです。けれども、一時期悲しみが伴っても、罪を打ち捨てるところの真の喜び、自分を捨てるところにある解放があります。「神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせる」と使徒パウロは言いました(2コリント 7:10)。

2B 踊りに変えられる嘆き 6-12

30:6 私が栄えたときに、私はこう言った。「私は決してゆるがされない。」30:7 主よ。あなたはご

恩寵のうちに、私の山を強く立たせてくださいました。あなたが御顔を隠され、私はおじ惑っていましたが。

ここで話している「私の山」とは、力や権威また、イスラエルという国を指しているかもしれないし、また自分の町、ダビデの町はシオン山にあるので、そのように言っているのかもしれませんが。いずれにしても、ダビデを強め、栄えさせてくださったのは、主が恵んでくださったからです。しかし、ダビデはその恵みの中で高慢になっていました。「私は決してゆるがされない。」と内心、話していました。これは、私たちが神の恵みと祝福の中にいる時に、陥ってしまう高揚感であります。

神は私たちが祝福したいと願っておられます。私たちの行ないや私たちの姿に関わらず、ご自分が祝福したいと願われているから祝福するのです。それが恵みです。この恵みが途絶えることなくいつまでも自分から流れていけばよいのですが、それを閉ざしてしまうのが高慢です。私たちは、健康でいるとき、また問題がないときに、「これはいつまでも続く」というようにそれが当然のこと、当たり前のこととってしまうのです。

けれども、その時に恵みは途絶えます。その時に、ダビデと同じように「あなたが御顔を隠され、私はおじ惑っていましたが。」となってしまうのです。自分は決して揺るがされない、と言っていた矢先に、神が自分から顔を背けられた、私はおじ惑っていると萎縮するのです。これだけ自分というものがはかない存在、移り変わりの激しい存在であることが分かります。

30:8 主よ。私はあなたを呼び求めます。私の主にあわれみを請います。30:9 私が墓に下っても、私の血に何の益があるのでしょうか。ちりが、あなたを、ほめたたえるのでしょうか。あなたのみことを、告げるのでしょうか。30:10 聞いてください。主よ。私をあわれんでください。主よ。私の助けとなってください。

これは、病の中にいる人がいのる祈りです。確かに主は、人が死ぬことを定めておられます。けれども、主のみこころであれば、もっと長く生きたい。そして御言葉を伝えて、神を賛美していきたい。天においては、もちろん神を賛美しているけれども、この地上であなたのことを伝えていきたいという願いです。

30:11 あなたは私のために、嘆きを踊りに変えてくださいました。あなたは私の荒布を解き、喜びを私に着せてくださいました。30:12 私のたましいがあなたをほめ歌い、黙っていることがないために。私の神、主よ。私はとこしえまでも、あなたに感謝します。

嘆きを踊りに、荒布を喜びにそのまま変えられています。これが福音ですね、罪の増し加わるところに、恵みが満ちあふれます。そこで大事なのが 12 節です、いつまでも主をほめたたえ、主に感謝するとダビデは言っています。実は、これがなかなかできないのが私たちです。ダビデが神の

恵みによって栄えたのに、「私はゆるがされぬ」と思いました。ゆえに、御顔を隠すようなことを神は許されます。そこで自分の至らなさ、はかなさを知って、そこから救われて感謝に満ちあふれます。恵みのマンネリ化が起こるのです。恵みに押れてしまうのです。それで感動がなくなるので、賛美も途切れるのです。

ですから御顔を隠されるようなことも、ある意味で祝福です。試練をこの上もない喜びとみなさない、とヤコブは言いました。その中で忍耐が生まれ、成熟に向かいます。上下に揺れる自分を見手、その自分の弱さを知ることによって、次第にどんなことがあっても、調子の良い時でも自分ではなく神が行っておられるのだと、感謝し、賛美することができるようになるのです。

2A 主への信頼 31

31 篇は、同じように苦しみの中で嘆きを言い表している祈りです。おそらく、アブシャロムがエルサレムに来て、それからダビデを攻めてこようと謀議を行っているのだと思います。けれども、その嘆きの祈りの中で、彼は強い意志をもって「主を信頼します」と言います。どんなに大水が自分の上を乗り越えようが、主が私の神であると確信をもって語ります。これはちょうど、前回学びました27 篇と同じです。「私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、主の家に住むことを。(4 節)」どんなに酷い状況の中に入っても、主の家の中に行けば、その中で大きな勝利を得ます。けれども、問題はまだそのまま残っています。それで嘆く祈りを捧げるのですが、それでもまた主の家で勝利を宣言します。そうしているうちに、心も安定して、逆境の中でも勝利を宣言することができるようになる、という内容です。

1B 御手にゆだねる魂 1-8

31 指揮者のために。ダビデの賛歌 31:1 主よ。私はあなたに身を避けています。私が決して恥を見ないようにしてください。あなたの義によって、私を助け出してください。31:2 私に耳を傾け、早く私を救い出してください。私の力の岩となり、強いとりでとなって、私を救ってください。31:3 あなたこそ、私の巖、私のとりでです。あなたの御名のゆえに、私を導き、私を伴ってください。31:4 私をねらってひそかに張られた網から、私を引き出してください。あなたは私の力ですから。

ダビデは再び、主こそが自分の拠り所であることを強く訴えて祈っています。ダビデの子であるキリストが、ここに隠されています。イエス・キリストこそが神の義であります。「私たちには、御父の御前で弁護して下さる方があります。それは、義なるイエス・キリストです。(1ヨハネ 2:1)」そして、この方こそが巖であります。ペテロがイエス様に、「あなたは、生ける神の御子キリストです。」と告白したら、「わたしは、このペトラ(巖)の上に、わたしの教会を建てます。(マタイ 16:18)」と言われました。ここに、世に打ち勝つ信仰があります。

31:5 私のたましいを御手にゆだねます。真実の神、主よ。あなたは私を贖い出してくださいました。
31:6 私は、むなしい偶像につく者を憎み、主に信頼しています。31:7 あなたの恵みを私は楽し

み、喜びます。あなたは、私の悩みをご覧になり、私のたましいの苦しみを知っておられました。
31:8 あなたは私を敵の手に渡さず、私の足を広い所に立たせてくださいました。

嘆き祈る祈りから、主への深い信頼による安心へと導かれています。「私のたましいを御手にゆだねます。」という言葉は、まさにイエス様が十字架で最後の息を引き取られる直前に発した言葉です。ゆだねることのできる魂は、安らぎを与えます。状況が変わっていなくても委ねきってしまった魂には安らぎが来るのです。その委ねによって、ダビデは今、アブシャロムたちがエルサレムにいることを知りながら、「贖い出してくださいました」と確信をもって話しています。

6 節の「むなしい偶像」というのは、神を信じない異邦人と同じような価値観のことです。ねたみやそねみ、怒りや憤り、不潔な行ないや貪りなど、そのような類いのものです。そして、「恵みを楽しん」でいます。これが今日の学びのテーマです。恵みにいかに押れっ子にならないか、恵みを楽しんでいることができるか、ということです。そしてダビデは、「広い所に立たせてくださった」と言って、今の苦境から助け出されたことを話しています。

2B 御手の中にある時 9-18

しかし、彼は絶望の中に次になだれ込みます。

31:9 私をあわれんでください。主よ。私には苦しみがあるのです。私の目はいらだちで衰えてしまいました。私のたましいも、また私のからだも。31:10 まことに私のいのちは悲しみで尽き果てました。私の年もまた、嘆きで。私の力は私の咎によって弱まり、私の骨々も衰えてしまいました。

苦しみと嘆きによって体がかなり衰弱していることを言い表しています。それほどまだ、老衰している訳ではないけれども、老衰してしまったようになってしまっています。

31:11 私は、敵対するすべての者から、非難されました。わけても、私の隣人から。私の親友には恐れられ、外で私に会う者は、私を避けて逃げ去ります。31:12 私は死人のように、人の心から忘れられ、こわれた器のようになりました。31:13 私は多くの者のそしりを聞きました。「四方八方みな恐怖だ。」と。彼らは私に逆らって相ともに集まったとき、私のいのちを取ろうと図りました。

アブシャロムとそれに与する者たちが、エルサレムに集まっています。そしてダビデを非難しています。その中にはダビデの家臣だったものたちが、もちろん数多くいます。ダビデの友でもあり、助言においては天才であったアヒトフェルが、ダビデを裏切り、彼を殺すべく具体的な計画を立てています。このようにして、徹底的な孤独感をダビデは味わっていました。その自分の姿を、「こわれた器のようになりました。」とあります。自分が元気な時は、いろいろな人が自分のところに来ますが、試練の時には多くの人々が去ります。友人だと言っていた人々が、利用して利益を得ようとしていたことが、その時に判明します。

そして、彼らからの中傷は、「四方八方みな恐怖だ。」と表現しています。ダビデを狙う計画を立てている時に、自分を守ってくれる存在は何一つなくなってしまったのです。けれども、ダビデが引き上げられる時は、恵みが自分を取り囲むということを後で表現します。私たちが何で取り囲まれているかを考える時、恵みで取り囲まれているか、それとも恐怖や罪意識などで取り囲まれているか考えてみる必要があるでしょう。

31:14 しかし、主よ。私は、あなたに信頼しています。私は告白します。「あなたこそ私の神です。」
31:15 私の時は、御手の中にあります。私を敵の手から、また追い迫る者の手から、救い出してください。31:16 御顔をあなたのしもべの上に照り輝かせてください。あなたの恵みによって私をお救いください。

激しい嘆きを言い表した後で、「しかし」とダビデは言っています。どんなに嘆こうが、しかし、なのです。そして彼の告白は単純ですが、「あなたこそ私の神です」というものです。他の者たちを恐れている時は、神を神としていません。他の者たちを神としてしまい、恐れているのです。それをやめて、主のみを神とします。

そして興味深い表現は、「私の時は、御手の中にあります。」という言葉です。私が通っていく出来事には、すべて神の定められた時があります。その時が来なければ、自分がいくらもがこうと何も生まれてきません。むしろ、主がちょうどよい時に引き上げてくださることを信じ、主にゆだねるのです。「ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神が、ちょうど良い時に、あなたがたを高くしてくださるためです。(1ペテロ 5:6)」

そして、「御顔を照り輝かせてください」とあります。これは、顔を向けてくれたら私たちはとても嬉しいですね。顔を背けられたら、辛いです。けれども、主がご自分の顔を向けてくださいます。そして、その結果は恵みです。一方的な神の好意であります。アロンの祝祷があります、「主が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。(民数 6:25)」

31:17 主よ。私が恥を見ないようにしてください。私はあなたを呼び求めていますから。悪者をおぼろげにしてください。彼らをよみで静まらせてください。31:18 偽りのくちびるを封じてください。それは正しい者に向かって、横柄に語っています。高ぶりとさげすみをもって。

主の恵みを受けて、正しいとみなされた者に対して、それでも告発をしているその口を閉じさせてくださいと祈っています。この短い嘆きの声を神に申し立てたら、次の勝利の言葉が出てきます。

3B 奇しい恵み 19-24

31:19 あなたのいつくしみは、なんと大きいことでしょう。あなたはそれを、あなたを恐れる者のためにたくわえ、あなたに身を避ける者のために人の子の前で、それを備えられました。31:20 あな

たは彼らを人のそしりから、あなたのおられるひそかな所にかくまい、舌の争いから、隠れ場に隠されます。

分かりますか、嘆きの声を主に聞かせて、それから主を信頼しますという表明をし、それから再び嘆きの淵に入っていく、けれども再び主を信頼しますと表明し、そしてついに感謝と賛美に変えられています。私たちの祈りは、このようなものです。「いつくしみが大きい」と言うところまで祈り続けるのです。再び、恐れが取り囲んでも、また祈るのです。すると、その繰り返しはいつの間にか消え、安定した賛美へと導かれます。

「隠れ場に隠され」とあります。これは、詩篇 27 篇 5 節で、「主が、悩みの日に私を隠れ場に隠し、その幕屋のひそかなところに私をかくまい」とある通りです。ダビデは一つ心になって、主の家を求め、激しくそれを求めたのです。

31:21 ほむべきかな。主。主は包囲された町の中で私に奇しい恵みを施されました。31:22 私はあわてて言いました。「私はあなたの目の前から断たれたのだ。」と。しかし、あなたは私の願いの声を聞かれました。私があなたに叫び求めたときに。

エルサレムの町は包囲されていても、ダビデはなおのことそこで奇しい恵みを施されています。「奇しい」とは、自分の思いをはるかに超えたという意味合いがあります。不思議で、人の理解や能力を超えたところにある、神の恵みです。そして、彼は悔い改めることができました。それはこの恵みを忘れそうになったことです。「私はあなたの目の前から断たれたのだ。」と慌てて言ってしまいました。神に恵みを施されて、私は何度となくこの悔い改めの祈りを捧げます。

31:23 すべて、主の聖徒たちよ。主を愛しまつれ。主は誠実な者を保たれるが、高ぶる者には、きびしく報いをされる。31:24 雄々しくあれ。心を強くせよ。すべて主を待ち望む者よ。

ダビデはこの祈りの体験に基づき、聖徒たちに主を愛することを呼びかけます。「誠実な者」とは、主に信頼する者のことです。一心に主に抛り頼み、すべてを投げ打って、心を貧しくしている者のことです。その反対が高ぶる者です。そして詩篇 27 篇と同じ終わりになっています。「雄々しくあれ。心を強くせよ。すべて主を待ち望む者よ。」心の弱まっている時に自分に言いかける言葉です。

3A 罪からの救い 32

そして 32 篇にも、「取り囲まれる」という言葉が出てきます。7 節に、「救いの歓声で取り囲まれる」とあります。心の喜びと主への賛美の源泉は、罪の赦しであり、罪から赦されたことを知っていることです。

1B 罪の覆い 1-5

32 ダビデのマスキール

マスキールは、「指導を与える」という意味です。

32:1 幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。32:2 幸いなことよ。主が、咎をお認めにならない人、心に欺きのないその人は。32:3 私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。32:4 それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髓は、夏のひでりでかわききったからです。セラ 32:5 私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を主に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。セラ

午前礼拝でこの箇所を学びました。ダビデは、罪の赦しを得たことによって、歓喜の声を挙げました。ここでの問題は「黙っている」ということでした。黙れば、それだけ自分の中で骨髓が干からびてしまうほどの渇きの力を、罪意識は与えます。イエス様は十字架の上で、「渇く」と言われましたがそれは、肉体以上に罪から来る渇きです。そして、罪を神に打ち明けることによって、そこにある赦しはあまりにも豊かでした。神に罪を打ち明けると、神は豊かに赦してくださいます。

2B 神からの悟り 6-11

32:6 それゆえ、聖徒は、みな、あなたに祈ります。あなたにお会いできる間に。まことに、大水の濁流も、彼の所に届きません。32:7 あなたは私の隠れ場。あなたは苦しみから私を守り、救いの歓声で、私を取り囲まれます。セラ

罪の赦しを得たということが、聖徒がみな主に対して祈る大きな動機となります。罪を言い表す祈りです。そして、「あなたにお会いできる間に。」とありますが、罪の赦しへの招きはその時に与えられるものであります。イザヤ書にこう書いてあります。「55:6-7 主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦して下さるから。」パウロは言いました、「今は恵みの時、今は救いの日です。(2コリント 6:2)」

そして、その喜びはどんな大水の濁流も奪い取ることはできません。そうです、私たちの信仰がどれだけ強いものかどうかは、その人がどれほど自分の罪を赦されていることを知っているかどうかにかかっています。罪の赦された不道德な女はイエス様をたくさん愛しました。パリサイ人のシモンは、イエスへの愛はありませんでした。自分が正しいと思っていたからです。そして、救いの歓声がダビデを取り囲んでいます。この声を聞いたことがありますか？自分が罪を言い表す、それで赦された、洗い流されたという経験をしましたか？その後には霊の耳は、大きな救いの歓声を聞いています。

32:8 わたしは、あなたがたに悟りを与え、行くべき道を教えよう。わたしはあなたがたに目を留めて、助言を与えよう。32:9 あなたがたは、悟りのない馬や驟馬のようであってはならない。それらは、くつわや手綱の馬具で押えなければ、あなたに近づかない。

主ご自身が今、語ってくださっています。罪の赦しを得るためには、罪を告白する必要があります。それは神の優しい呼びかけによって成り立っています。決して、取調室の自白のような強要はありません。しかし、それを良いことに自ら主に立ち返ることをしなければ、神の懲らしめはもっと厳しくなります。強いられるようであれば、振り返ることができないという神との関係はとてもし残念であります。

パウロは、コリントにある教会に対して、心を開いてくれるようお願いしました。多くの人が、神に悔い改めて心を開き、パウロの言うことを聞くようになりました。けれども、一部はいつまでも反抗していました。それでパウロは、強いられるようにして厳しい処置を取らなければいけないことを第二の手紙の最後で話しました(13:10)。神との愛の関係を保つためには、神の呼びかけに対して自ら主体的に神に近づく必要があります。

32:10 悪者には心の痛みが多い。しかし、主に信頼する者には、恵みが、その人を取り囲む。
32:11 正しい者たち。主にあって、喜び、楽しめ。すべて心の直ぐな人たちよ。喜びの声をあげよ。

ダビデは対比をしています。悪者は心の痛みが多いです、けれども主を信頼する者は、再び出てきた表現ですが、「恵みが取り囲む」ということです。罪が増し加わるところには、恵みが溢れ流れます。そこで、「正しい者たち」と言っています。また、「心の直ぐな人たち」と言っています。神が正しいと言ってくれるのは、このように自分の罪を認めた者たちです。自分の正しさを積み上げるのではなく、神が正しいことを認め、自分がその前で頭を垂れて、罪人であることを認める人です。そして、この罪の赦しの確信があるから、そこから喜びと楽しみが出てきます。

4A 新しい歌 33

33 篇は、イスラエルの民全体が会衆として主に対して歌う賛美です。

1B 楽器による歌 1-5

33:1 正しい者たち。主にあって、喜び歌え。賛美は心の直ぐな人たちにふさわしい。

33 篇は 32 篇の続きです。正しい者たち、心の直ぐな人たちは、罪を赦されて救われている人たちであります。そこから湧き出てくる喜びを持っている者たちが、喜び歌う資格を持っています。

33:2 立琴をもって主に感謝せよ。十弦の琴をもって、ほめ歌を歌え。33:3 新しい歌を主に向かって歌え。喜びの叫びとともに、巧みに弦をかき鳴らせ。

立琴、十弦の琴をもって主に感謝して、ほめ歌を歌っています。当時の立琴がどのようなものか分かりませんが、イスラエルには今もあり、それを奏でる人たちもいます。楽器をもって主をほめたたえることは、神の御心になっています。



ここで大事なものは、「新しい歌」であります。罪の赦しによって、湧き出てくる救いの喜びは、「恵みが自分を取り囲んでいる」と言わせる継続的なものです。ですから、そこから出てくる歌は新しいものとなっています。私たちが恵みに押れてしまうことによって、その歌は自分の心から離れ口先だけのものになります。しかし、恵みを恵みとして受け取っている時に、それは新しい歌となっているのです。使徒パウロは言いました。「たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。(2コリント 4:16)」

33:4 まことに、主のことばは正しく、そのわざはことごとく真実である。33:5 主は正義と公正を愛される。地は主の恵みに満ちている。

主を賛美する時に、新しい歌をうたう時に、それは「主のことば」に基づいていることを知らないといけません。しかも、主のことばが正しい、その御業が真実であると信じているからこそ、賛美が出てきます。「礼拝賛美と音楽」という小冊子には、第一章にこう書いてあります。「神のことばの理解と知識が増し加わると、神の愛と神の偉大な救いの計画に気づき、最も自然な結果は、主を礼拝し、賛美し感謝を捧げたいと強く願うようになることだ。」そして、主は、その言葉によって地に恵みを満たしています。

2B 主のみことばによる統治 6-17

33:6 主のことばによって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいぶきによって。33:7 主は海の水をせきのように集め、深い水を倉に収められる。33:8 全地よ。主を恐れよ。世界に住む者よ。みな、主の前におののけ。

私たちは、自然という恵みに預かっていますが、これらは主が語られたその息吹によって成り立っています。主が語られたから天があり、そして海があります。このことに、まず全地が認めなければいけないのです。そこに差別はありません、どこの国の人もどこの民も、被造物に神の永遠と力が啓示されていることを知る必要があります。

33:9 まことに、主が仰せられると、そのようになり、主が命じられると、それは堅く立つ。33:10 主は国々のはかりごとを無効にし、国々の民の計画をむなしくされる。33:11 主のはかりごととはとしえに立ち、御心の計画は代々に至る。33:12 幸いなことよ。主をおのれの神とする、その国は。

神が、ご自身のものとしてお選びになった、その民は。

私たちは詩篇第二篇で学びました、国々が騒ぎ立ち、神とキリストに反抗することを見ました。その枷を解き捨てようと言って、相集まります。国々とここで言っているのは、神を認めないで、心の中で神はいないと言っている人々を代表しています。ですから、すべての人の心にある高慢を取り扱っています。神を知らないと言っている人々のはかりごと、またその計画を神は空しいものとされます。そしてご自身の計画を永遠に堅く立てられています。一人一人の生活もそうです。自分は自分のやりたいように、神のことばをないがしろにしてやっていけるのだと思っています。けれども、必ず神の語られているとおりの人生になるのです。神がこれを行ってはいけないと言っていることを行なっているのならば、それを行った結果もその通りになるのです。

そして、幸いなことよ、という言葉が出てきました。それは主を己の神とする国です。そして神の選ばれた民です。これはもちろん、イスラエルのことです。けれども、新約聖書には神の教会もまた、キリストを自分たちの頭とし、キリストにあって選ばれた神の民であります。この世がいかにか右に向いていたとしても、右には動きません。左に動いたとしても左に動きません。この世が何といっても、主が神であるとしている時、私たちは幸せなのです。

33:13 主は天から目を注ぎ、人の子らを残らずご覧になる。33:14 御住まいの所から地に住むすべての者に目を注がれる。33:15 主は、彼らの心をそれぞれみな造り、彼らのわざのすべてを読み取る方。33:16 王は軍勢の多いことによっては救われぬ。勇者は力の強いことによっては救い出されぬ。33:17 軍馬も勝利の頼みにはならない。その大きな力も救いにならない。

ここで強調されているのは、国の行く末は軍事力ではなく、その民の一人一人が、主から見られていて、その心が直ぐであるということによります。力ではなく、主との関係によるということです。主が、心の動機に従って裁かれるのであって、その人がどれだけの影響力を持っているかによって裁かれるものではありません。最後の審判において、不信者でよみがえるのは、「大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。(黙示 20:12)」とあります。それぞれが、心の中でどのようなことを思い、またどのような言葉を話し、そしてどのような行ないをしたかにしたがって裁かれます。

3B 注がれる主の目 18-22

そこで、主はご自分を恐れるものを特別に扱ってくださいます。

33:18 見よ。主の目は主を恐れる者に注がれる。その恵みを待ち望む者に。33:19 彼らのたましいを死から救い出し、ききんのときにも彼らを生きながらえさせるために。33:20 私たちのたましいは主を待ち望む。主は、われらの助け、われらの盾。33:21 まことに私たちの心は主を喜ぶ。私たちは、聖なる御名に信頼している。

主を恐れることは、その恵みを待ち望むことです。主が恵みをもって自分に接してくださることを、期待していることです。その恵みによって、私たちは死から救われ、またこの地上での飢饉、あるいは試練からも救われ、そして主が私たちの守りとなってくださいます。

33:22 主よ。あなたの恵みが私たちの上にありますように。私たちがあなたを待ち望んだときに。

大事なのは、ここで「恵みが私たちの上」となっているところです。これは、恵みが自分に臨んで、溢れ出ていくことを表しています。聖霊が上に臨まれる時に力を受けると、イエス様は約束してくださいましたが、それと同じです。聖霊が自分の中におられるだけでなく、満ちて、そして溢れ出てくださる関係です。したがって、主に賛美とほめ歌というものが、神の恵みが自分の上に臨み、溢れる時に出てくるということです。主を待ち望む時に、恵みが上にあるのです。ですから、ずっと賛美ができます。

5A 祈りの答え 34

そして 34 篇に入ります。ここまでに、私たちが尽きることのない恵みに浸かっていることができるし、浸かっていなければいけないことを学びました。次に 34 篇では、そのすばらしさを味わいなさい、じっくり味わおうというダビデの興奮に満ちた賛歌になっています。

1B 主のすばらしさの味わい 1-10

34 ダビデによる。彼がアビメレクの前で気違いを装い、彼に追われて去ったとき

この詩篇の背景がはっきりと書かれています。ダビデは、サウルの手から逃げ始めました。けれども、イスラエルの地にいるとどこでもサウルに通報する者たちがいます。そこで事もあろうに、ダビデは敵陣に入ってしまったのです。ペリシテ人のアキシュのところに行きました。「アビメレク」というのは、ペリシテの王の称号です。エジプトの王がパロと呼ばれているのと同じです。それで、自分がダビデであることがばれそうになった時に彼は気違いを装いました。それで、捕まえられずに難を逃れたのです。

そしてダビデは、アドラムに行きました。そこに、ダビデの兄弟たちや家族の者たち、そして困窮している者たち、負債のある者、不満のある者たちも集まってきました。彼らがダビデに忠誠を誓う、勇士となってきます。この彼らに、ダビデは救われたことの喜びを分かち合うのです。

34:1 私はあらゆる時に主をほめたたえる。私の口には、いつも、主への賛美がある。34:2 私のたましいは主を誇る。貧しい者はそれを聞いて喜ぶ。34:3 私とともに主をほめよ。共に、御名をあげよう。

ダビデが強調しているのは、「あらゆる時」「いつも」であります。これまで読んできた詩篇と同じ

です、恵みが自分を取り囲んでいるので、恵みが上に臨んでいるので、そこに喜びと賛美があります。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことについて、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあってあなたがたに望んでおられることです。(1テサロニケ 5:16-18)」

そして、「主を誇る」と言っています。ダビデはペリシテ人から救い出されたことを、自分の賢さや力によるものとは決して言いませんでした。主がすごいから、救われたのだと、自分ではなく主を誇ったのです。そして、アドラムに来ている者たちに、共に主をほめよと言っています。主への賛美や喜びは、このようにして伝染していきます。

34:4 私が主を求めると、主は答えてくださった。私をすべての恐怖から救い出してください。34:5 彼らが主を仰ぎ見ると、彼らは輝いた。「彼らの顔ははずかしめないでください。」34:6 この悩む者が呼ばわったとき、主は聞かれた。こうして、彼らはすべての苦しみから救われた。34:7 主の使いは主を恐れる者の回りに陣を張り、彼らを助け出される。

主を求めると、主は答えてくださいます。そして主を仰ぎ見ると、彼らに心を留めてくださるので彼らの顔は輝きます。そして、ダビデの勇士たちには主の使いが共にいました。だから、戦いの時に助け出してください。

34:8 主のすばらしさを味わい、これを見つめよ。幸いなことよ。彼に身を避ける者は。

いかがでしょうか、私たちはどれだけ主のすばらしさを味わって、見つめているでしょうか。神のすばらしさを頭で知ることと、それを体験することとは大きな違いです。私たちの言葉に、神についてどのような単語が多く出てくるでしょうか。「恵み」でしょうか、「愛」でしょうか、「平和」でしょうか。どれもすばらしいですね。詩篇の学びでは、これまで「恵み」が数多く出てきましたが、パウロが自分のことを話している時に、このように言いました。「私は使徒の中では最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜなら、私は神の教会を迫害したからです。ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。(1コリント 15:9-10)」恵みを、パウロは連発しています。それだけ、神の恵みを彼は味わっていたのです。

34:9 主を恐れよ。その聖徒たちよ。彼を恐れる者には乏しいことはないからだ。34:10 若い獅子も乏しくなって飢える。しかし、主を尋ね求める者は、良いものに何一つ欠けることはない。

主を恐れる、という言葉も詩篇に多くでてきました。詩篇 23 篇で学びましたが、そのようなものは乏しいことが何一つありません。

2B 主を恐れる者 11-14

そして次から主を恐れることは何かを、具体的に勧めをしていきます。

34:11 来なさい。子たちよ。私に聞きなさい。主を恐れることを教えよう。34:12 いのちを喜びとし、しあわせを見ようと、日数の多いのを愛する人は、だれか。34:13 あなたの舌に悪口を言わせず、くちびるに欺きを語らせるな。34:14 悪を離れ、善を行なえ。平和を求め、それを追い求めよ。

主を恐れることによって、命を喜びとしています。具体的には、悪口を言わないということです。欺かないということです。そして悪から離れて善を行ないます。それから平和を求めます。一つ一つが、尊い勧めです。ダビデは、悪口やそしりと戦っていました。サウルに自分のことの悪口を吹き込む者たち、またアブシャロムに与したダビデの元部下たち。悪口が人にいかなる害をもたらすかを知っていました。それから、欺きです。悪意を持っているのに、それを何事もないように平然と話していることです。そして、悪に対して悪で報いたいのですが、そうではなく善の中に留まります。そして平和を愛します。争いではなく、自分に関する限り平和を求めます。

3B 正しい者の叫び 15-22

34:15 主の目は正しい者に向き、その耳は彼らの叫びに傾けられる。34:16 主の御顔は悪をなす者からそむけられ、彼らの記憶を地から消される。34:17 彼らが叫ぶと、主は聞いてくださる。そして、彼らをそのすべての苦しみから救い出される。34:18 主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。

再び「主の目」が出てきました、主はいつも近くにおられて、その祈りを聞いてくださいます。その相手は「正しい人」であり、「心の打ち砕かれた者」であります。

34:19 正しい者の悩みは多い。しかし、主はそのすべてから彼を救い出される。34:20 主は、彼の骨をことごとく守り、その一つさえ、砕かれることはない。34:21 悪は悪者を殺し、正しい者を憎む者は罪に定められる。34:22 主はそのしもべのたましいを贖い出される。主に身を避ける者は、だれも罪に定められない。

正しい者は、悩みが多いです。神を信じているがゆえに、葛藤があります。隣人を愛するがゆえに、共に苦しみます。けれども、主は守られます。興味深いことに、イエス様が十字架に付けられて、足の骨が折られなかったのは、ここの 20 節が成就したからだと言ハネは記しました。そして、次にすばらしいのは、「罪に定められない」ということです。これが結論になるでしょう、神の恵みによって救われた私たちが、罪に定められないこと。これこそが福音です。「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。(ローマ 8:1)」